



7月29日(金)から、8月2日まで、「陶芸の森」で、大阪芸術大学の二、四回生らが自作の壺・皿・酒器などを穴窯で焼成しました。ガス窯や電気窯は大学にもあるものの、「最も古い形の窯」産地・信楽の穴窯で真の信楽焼を焼きたい。やはり本物は手ごたえが違う」ということです。

引率したのは南野馨氏(同大非常勤講師)。現地指導は大西左朗、徳地裕(久川創の各氏が当たりました。南野氏も含め4人も信楽町在住の陶芸家です。

信楽には法人や個人持ちの穴窯がいくつありますが、陶芸の森の穴窯は定評があり、大学生らの焼成の直前にも高橋春斉氏(陶芸作家・滋賀県無形文化財)が使っていました。

学生らは作品を大学内で素焼きした後、29日午前中に大阪から搬送、窯詰して翌30日午後から焼成にかかりました。

穴窯は登り窯以前に信楽で築かれていたごく原始的な窯。斜面を利用してトンネル状に築窯。炎は作品を焼き上げながら後部から煙を排出します。現在は作品



▲参加した学生たち

信楽・陶芸の森で穴窯“修業” 大阪芸大陶芸コースの学生たち

寄稿者●まちかど特派員 小谷 柳太(信楽町)

を置く階段や煙突などの工夫も進歩しているが、自然の炎による強固な焼き締め、巧まざる灰釉のデザインにはファンも多数います。

陶芸コースの学生らは卒業すると各地に散らばりますが、産地・信楽に移住して窯元の従業員になったり、陶芸教室のインストラクターなどをしながら、やがて独立、自分で開窯することもあります。現在、同校OB約20人余が信楽で修行を続けています。

有名な信楽の登り窯は燃料を焚く「火袋」と、幾室にもつらなる焼成室を分離することで、熱効率や生産量を飛躍的に向上させました。窯業史の中で江戸期の画期的な発明とされるが、穴窯の発展形態の一つともいえます。ガス・電気など化石燃料文明は伝統的信楽焼に大きな変化をもたらしましたが、現代でも山並を流れる煙への郷愁は強く、信楽の昔を語る穴窯が信楽各地で築窯を重ねています。



●まき割りから自分たちで

「かわいい！」保育体験

～貴生川小学校6年生～

寄稿者●まちかど特派員 杉山 祐子(水口町)

7月13日(水)、14日(木)の2日間、貴生川小学校6年生が貴生川保育園を訪れ、園児たちと交流をしました。これは6年生の総合的な学習の一環で、保育の現場に入り、園児たちと直接触れ合うことにより「職業」としての保育を体験しようという初めての試みです。

園の先生方から事前にガイダンスを受け、授業の中で自分たちが出来ることを検討。3～5歳児の各クラスに6名ずつが入り、手遊びや読み聞かせ、水遊びなどの計画をたてました。当日、自己紹介の時には緊張気味だった笑顔も次第にほぐれ、児童からは「思ったより小さい」「すごくかわいい」などの声が出ていました。午前中のほんの数時間ではありましたが、縦のつながりが減っているこの頃、いろいろな年代の人と交流することはお互いにとてもいい経験です。6年生は幼い園児とともに過ごした中で、自分の成長をもたどってくれたのではないのでしょうか。



▲一緒にお散歩楽しいな
●自己紹介は緊張するな

